

公共事業と教育-学びの場から考える-

No. 8



学びの場から考える
国土学アナリスト 森田 康夫

●●8

Heinemann社の中学教科書「geography 360. Core Book 3」。「神戸地震 (阪神淡路大震災)」の内容も掲載されている。



「日本語で「tsu(津)」は「harbour」、"nami(波)"は「wave」を意味します。従って「tsunami(津波)」は「harbour wave」を意味し、巨大な波が日本の港(海岸)を襲うことから名付けられました。」

これはイギリスの教科書出版社(Heinemann社)が発行する中学地理教科書に採録された「津波」の説明文です。同教科書には、神戸地震(阪神淡路大震災)を採録した見開きのページもあります。

イギリスは安定した地殻の上に位置しているため、統計的にみても、大地震はほとんど発生しません。1900年以降の自然災害を対象とした国際統計『EM-DAT=The OF DA/CRED International Disaster Database』によると、イギリスでは、同年以降これまでに2件の地震被害が登録されているのみ(死者数はゼロ)で、津波については被害登録すらありません。

13~14年の冬、イギリスのウエールズやイングランド南部では、過去250年で最大といわれる記録的な降雨(長雨と嵐)により、大規模な洪水が発生しました。テムズ川も氾濫し、ウリアム王子が腰まで泥水につかかって土嚢を運んでいる映像に感銘を受けた人もいたのではないのでしょうか。これだけの歴史的大洪水にもかかわらず、死者数は数人にとどまりました。

イギリスでは大地震はほとんど発生することがなく、風水害の発生頻度・人的被害も、日本と比べてかなり小規模です。しかし、イギリスの地理教科書で

高校地理の危機？ イギリスの地理・地学一体教育から学ぶ

は、地学と地理、自然災害と防災に関する知識を体系的に学習できる枠組みが準備されており、東日本大震災以降、わが国でその重要性が再認識されている「国土・防災教育」の効果的展開が可能となっています。

日本の中学校に相当するキー・ステージ3(KS3)の地理教科書をみると、「地震と火山活動」、「河川と洪水」、「海岸と浸食」といった自然地理に関する学習単元(テーマ)が章立てされているとともに、地球の内部構造、地球の内作用(プレートテクトニクス、地震、火山)、地球の外作用(水循環と地形の変化、風化・浸食・堆積)など、日本では地学に分類される学習内容が、十分なページを割いて解説されています。

さらに、現在の国土は過去の種々の災害(地球の内作用・外作用)の繰り返しによって形成されてきたものであり、それ故に、「これからも地震や火山活動、洪水、海岸浸食といった災害は必然的に起こり得る。だからこそ、防災・減災対策が必要だ」といった明瞭な学習ストーリーが60ページ以上を割いて展開されています。

わが国では高校の「地理歴史科」が世界史、日本史、地理の3科目で構成されていますが、世界史を必修(地理と日本史はいずれかを選択)とする学習指導要領や大学入学試験の受験科目の影響などから、地理履修者は全生徒の半数程度に低迷しています。

14(平成26)年11月20日、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」が中央教育審議会に諮問され、高校教育について「日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直しの在り方」が議論されることとなりました。

地球上の自然や人間活動を俯瞰(ふかん)的に眺めることで、大局的な地球観や世界観をつかむことができます。とりわけ、世界的に見ても極めて脆弱な国土の上で暮らす日本人にとって、彼我(ひが)の国土の違い、自然条件の違いに気づくことは、ますますグローバル化する世界において不可欠な素養です。

日本人としてのアイデンティティを確立するため、歴史教育が重要であることは論を俟ちませんが、それと同じように地理教育を軽視することは、長い目で見れば、国力の低下につながります。

自然地理教育を重要視するイギリスから学ぶべきことは少なくありません。(毎週火曜日掲載)